

2023年8月20日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章7節

説教題：神の憐れみの中に生きる

カナダでお会いしたクリスチャンのご夫妻の話です。かつて商売をしておられる時、ある人がこのご夫妻を騙したのです。騙されて大変辛い思いをされました。しかしその騙した人が、今度は—(詳しいことは忘れましたが)—何か苦しい立場に置かれたのです。その時にその人は、この御夫妻に助けを求めて謝って来たそうです。ご夫妻は、自分達を騙したその人を赦し、「とりあえず今出来ることをして上げよう」ということで、手許にあったお金を上げようとされました。2万円上げるべきか、3万円上げるべきか迷われた。そこでハッと、「2万円と3万円迷っているのなら、これを合わせた5万円を上げよう」という思いになって、とりあえず5万円を施されたそうです。この兄弟は「キリスト教とは憐れみです」と言っておられました。その兄弟が、亡くなられる直前、朦朧とした意識の中でメモ用紙に走り書きされた言葉の中に、この一節がありました。「二倍のものを主の手から受ける、何という信仰のよろこび」。「二倍のもの」と書かれたこの言葉が何を指しているのか、私には分かりません。「永遠の命」のことを言われたのかも知れない、地上で経験された様々な祝福のことを言われたのかも知れません。しかしこの「5万円」の話が語るように、このご夫妻は、その信仰の生涯で『あわれみ』を生きられたな」という印象を受けています。そしてその結果、人生の最後に「二倍のものを主から受けた」と、告白せざるを得ない祝福を経験されたのだと思います。「二倍のものを主から受けた。主よ。感謝します」、そんなふう地上の人生を閉じることが出来たら、どんなに素晴らしいだろうか、と思います。

さて、今朝は「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから」(5:7)という御言葉について信仰の学びをして行きます。

「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから」(5:7)、私達は憐れみ深いでしょうか—(あなたは憐れみ深いでしょうか)。「はい」と言えれば幸いです…。その前に「あわれみ深い」とは、どういうことでしょうか。ここで使われている「あわれみ」という言葉は、「他の人の心の中にまで入って、その人の立場で物を見、その人に身になって考え、その人が感じるように感じる」、そのような意味の言葉だそうです。英語に「同情」という意味の「シンパシー」という言葉がありますが、「シンパシー」の語源は、「一緒に経験する」ということのようにです。それも「あわれみ深い」という意味を良く表していると思います。そのように、あたかも「一緒に経験する」ように同情する、苦しみを一緒に経験するように苦しむ、悲しむ、他者の心を自分の心とする、そのような本当に深い同情というか、心から相手を思う慈しみの心、その心を持つことが「あわれみ深い」ということなのだと思います。

しかし、「聖書」の語る「あわれみ」は、それだけではないようです。「あわれみ」という言葉は、「聖書」の中に沢山出て来ますが、私達に憐れみを勧める箇所に「マタイ18章」があります。少し長いですが引用します。「ある王様に、自分に1万タラントの借金のあるしもべがいたのです。そのしもべが返済の猶予を願うのです、王様は、しもべを憐れに思って赦してやりました。借金を帳消しにしてやったのです。(1万タラントというのは、例えば1日の労働賃金を5000円とした時、3000億円です。一生かかっても返すことのできない額です)。それほどの借金を赦してもらったその家来が、その直後、自分に100デナリの借金のある仲間と出会います。(100デナリというのは、同じように計算すると50万円程です)。決して小さい金額ではありません。しかし彼が赦してもらった1万タラントに比べれば、比べものにならない小さな額です。しかし彼は、その仲間を赦さず、あくまでも借金を取り立てようとして、牢に入れてしまったのです。それを聞いた王様は怒って、彼の借金帳消しを取消し、彼は牢に入れられてしまうのです。王様は、彼にこう言っています。『私がおまえをあわれんでやったように、おまえ

もなかまをあわれんでやるべきではないか』(マタイ 18:33)。ここでは、「あわれみ」が、具体的な「赦し」という行動を意味しています。

あるいは、「マタイ 25 章」には、次のような箇所があります。「『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき…食べる物を与え、わたしが渴いていたとき…飲ませ、わたしが旅人であったとき…宿を貸し、わたしが裸のとき…着る物を与え、わたしが病気をしたとき…見舞い、わたしが牢にいたとき…たずねてくれたからです』。すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか』。すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです』」(マタイ 25:34~40)。ここにも、イエス様が「あわれみ深い」ということで、私達に何を期待しておられるか、それが示唆されていると思います。つまり「具体的な愛の行い」、そういうものが期待されているのではないのでしょうか。ここで「これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」とあります。社会の中にこういう精神が生きているなら、その社会は素晴らしい社会になるだろうと思わされます。政治の力だけでは、どうにもならないことがあるのです。いずれにしても、相手と同じ思いになって喜ぶ、苦しむ、悲しむ、そんな心から相手を思う慈しみの心を持ち、そしてそれが、思いばかりでなく、具体的な行動となって現れる、そんな生き方をイエス様は期待しておられる、そんな生き方を「幸いだ」と言っておられるのではないのでしょうか。

しかし、実際どうでしょうか。私達は、そのような(イエス様から「あなたは本当に幸いだ」と言われるような)一隣みに生き得ているのでしょうか。先日も申し上げましたが、私は、赦しに生きることが出来ずに苦しんでいるような者です。皆さんは、いかがでしょうか。皆さんの生き方を、イエス様をご覧になった時、何と言われるのでしょうか。「天国は本当にある」という映画の中で、危篤状態の老人の枕元に牧師が呼ばれ、牧師が老人に聞きます。「何か悔い改めることはありませんか」。老人は言います。「何もかもだ」。願わくは、そのようにして人生を振り返ることのないようにしたいと思います。

しかし私達も、なかなかイエス様の期待しておられるような「あわれみ」に生きることが難しい者ではないのでしょうか。どうすれば良いのでしょうか。

実は「マタイ 18 章」にそのことを考える良い示唆が与えられています。先程の「3000 億円の借金が赦された男が、50 万円の借金を赦さなかった」という話です。この男と 50 万円の借金をしている友人との関係だけを見ると、貸してあった 50 万円を請求することは不当なことではありません。しかしここにあるのは、男と友人に関わる話だけではありません。その前の話があるのです。彼は、主人(王)から 3000 億円の借金を赦された人間でした。それが彼の前提です。つまりこの譬え話は、私達の生きている、生かされている現実とはどういうものか、ということを語るのです。3000 億円を赦された人間、それが私達だと語られるのです。

「3000 億円を赦された」と言われても、正直、今は実感として湧かないかも知れません。しかし、ラジオ牧師だった羽鳥明先生がこんな話をしておられます。先生が夢を見ました。先生は、夢の中で神の裁きの座に立っていました。そこで自分の人生の様々な場面を見せられました。自分の人生の裏も表も見せられて、自分でも「もうダメだ」と思ってくずおれた、その時に、どこからか澄んだ声が近づいて来て、その声が言いました。「父なる神様、この者の罪は、私が全部十字架で始末しましたから、だからこの男を赦して下さい」。「アッ、イエス様の声だ」

と思った瞬間に目が覚めたそうです。

私達は、人生の総決算の時があるとするなら、そしてその時、自分の人生の全てが見せられて、神の基準で—(私の基準ではない、神の基準で)—裁かれるとするなら、私達も「もうダメだ」とくずおれるしかないのではないのでしょうか。前にも申し上げましたが、私は4年前、交通事故に遭った時、魂が神の裁きの座に立たされるという幻を見せられました。足が震えました。「神の裁きの座に出るとはこういうことか」と思いました。しかしその時、私達にもイエス様の声が聞こえるのです。生涯の一切の罪が、全くなかったかのごとく、生まれてから一度も罪を犯したことの無い者のように認められ、天国に入って行くのです。そのために、私達は何かしたのでしょうか。何もしていないのです。ただ憐れまれ、赦されたのです。もう赦されているのです。そのためにイエス様が十字架で命を捨てて下さったのです。恐らく私達が「自分は3000億円を赦された人間である」ということ、その自分の罪と赦しの恵み—(神の憐れみ)—が本当に身に沁みて分かるのは、人生の最後の裁きの時かも知れません。

いずれにしても私達は、今、既に3000億円を赦されて在るのです。そんな大きな赦しと「あわれみ」を受けている、そのことを心に沁み込ませた時、私達も、誰かに対して「あわれみ」の心を持ち、「あわれみ」の行いに踏み出すことが出来るのではないのでしょうか。しかも、神の「あわれみ」は現在進行形です。「神のあわれみ」がテーマになっている「旧約」の「ホセア書」では、夫を裏切って逃げる妻に対する真実の愛を貫こうとする夫の愛の姿によって、神の愛が象徴されています。夫は、赦し続け、愛し続けます。神に対してしばしば真実であることが出来ない私達も、そのような「あわれみ」で憐れまれ続けているのです。だから、私達の信仰は守られているのです。そのことを、深く心に止め、私達も「あなたは幸いだ」と言って頂けるように、「あわれみ」に生きる者にして頂きたいと思うことです。

イエス様は言われました。「その人たちはあわれみを受けるから」(5:7)。「憐れみ深い人たちはあわれみを受ける」。あるいは「聖書」は語ります。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」(マタイ 6:14~15)。「人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです」(ヤコブ 2:13)。「憐れむ者だけが憐れまれる」、それは「新約聖書」の一貫した主張です。申し上げたように、それは私達を待っている死後の裁きの時に、神から「あわれみ」を受けるということもあるかも知れません。裁きの時が喜びの時となる、主から「あなたの人生は幸いだ」と言って頂ける時となる、そのような意味合いが強いのではないかと思います。しかしそれはまた、私達が、この地上において具体的な主の「あわれみ」を経験する、ということでもあるのではないのでしょうか。

最初にカナダで出会ったご高齢のご夫妻のことをお話ししましたが、このご夫妻について、もう何度もお話ししている話ですが、ここで申し上げたいとことがあります。このご夫妻は、施設のお子さんを短期間、自分の家に連れて来て、様々にお世話して、家庭の温かさを味わってもらい、そういう活動をしておられました。ある時、家でお世話した女の子が、「ここでずっと暮らしたい」と言い出しました。ご夫妻は、その子供さんを養子として受け入れるかどうか、随分悩んだのです。子供は「ここに来たい、ここで暮らしたい」と言う。でも自分達の年齢を考えた時に、とても育てて行く自信はない。結局、ご夫妻は「やはり施設に帰そう」と施設に連れて行かれたのです。しかし、そんな時に兄弟が夢を見ました。小さな天使がやって来て兄弟の胸を揺さぶったのです。そしてどこからか「最も小さな者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25:40)という御言葉が響いて来ました。目が覚めた時、兄弟は「引き取るのが御心や。神を信じよう、後は全部、神の憐れみにすがろう」と決めて、そのお子さんを引き取りに施設に行かれました。そのお子さんの手を引いて施設を出る時、空を見上げたら、東の空から西の空までキリストが手を広げて立っておられるのが見えたそうです。それは「そ

の子のことは、私が責任を持つから、あなた方は、出来るだけの愛でその子に関わって行きなさい」という励ましのメッセージだったのではないかと、私は勝手に思っています。ご夫妻は、その後の来し方を振り返って良く言っておられました。「あの子を育てるために必要なものは、全部神が備えて下さった。何も困らなかった」。神の「あわれみ」を経験されたのだな、と思います。「憐れむ者が憐れまれる」、その言葉を思うことです。それは、地上においても、様々な形で、現実のこととして有るのではないのでしょうか。

もちろん、私達は、それでも、どこまでも自己中心に振り回される、そんな弱さを纏っています。「あわれみの貧しさ」があるのではないのでしょうか。しかしその時には、「主よ、憐れんで下さい」と叫ぶことが出来ます。「私も、あなたから憐れまれた憐みで、愛された愛で、憐れみに、愛に生きることが出来るように、どうぞ憐れんで下さい」、そう祈って行くことが出来ます。いや、そうやって祈ることなしには、「あわれみ」に生きることは出来ないのではないのでしょうか。そうやって、私達もイエス様が教えて下さったように「あわれみ」に生きることを求めて行きたいと思います。先ほどのご高齢の兄弟は言われました。「キリスト教とは『あわれみ』です」。私達の生活を、私達の間人間関係を、私達の人生の軌跡を、そしてまたこの教会を、「あわれみ」で満たすことが出来たら幸いです。